

わが家の
ガイドライン

日本経済新聞社編

これだけは
言いつて
おく

日本経済新聞社

これ
だけは

わが家のガイドライン

日本経済新聞社編

信じて
お入り

日本経済新聞社

KLDKW C T O K
これだけは言っておく
わが家のガイドライン

昭和63年 8 月22日 1 版 1 刷

編 者 日 本 経 済 新 聞 社

© Nihon Keizai Shimbun, Inc., 1988

発 行 者 広 田 耕 司

発 行 所 日 本 経 済 新 聞 社

東京都千代田区大手町1-9-5 〒100-66

電話 (03) 270-0251 振替 東京 3-555

印刷 東光整版印刷／製本 関口製本

ISBN 4-532-09467-4

本書の無断複写複製(コピー)は、特定の場合を除き、著作者、出版社の権利侵害になります。

はしがき

旧家族制度の時代と異なり、現代の夫婦、親子関係にはきずなを結ぶ規範がない。それゆえ、夫・妻として、あるいは父・母として、家族とどうかかわればいいのか思い悩む人が少なくない。

例えば父親のあり方についても、さまざまな模索がある。少しでも物わかりのいい父親になろうと努める人もいれば、がんこおやじ、カミナリおやじなど、辛口タイプのおやじ像を演出する人もいる。だが、ある時子供の強い反発に出会い、混乱の度を深める結果を招く――。

家族が新たなきずなを築くには、いま、どんな方策が必要なのだろうか。もとより親子の関係は、父親だけの力で強化が図れるものではない。母親との共同作業を抜きには、まず不可能だ。そのためには、それぞれの家庭がわが家なりの指針、ガイドラインを創造する必要があるのではなからうか――そんな意図のもと、日本経済新聞の婦人面では昭和六十一年六月から「わが家のガイドライン」と題したコラムを設け、各界で活躍している方々

に、特に親子関係を中心に“家風のルールづくり”を綴っていただいている。

本書は、その中から六十三年六月末までにご登場いただいた百四人の方々の「ガイドライン」を収め、「これだけは言っておく」と改題したものである。履物はきちんとそろえるなど、自分のことは自分で行うよう子供に徹底する親もいれば、思いのままに生きてみよと、突き放す親もいる。まさに規範なき時代を象徴するがごとく、ご登場いただいた方々の親子のきずなの結び方は十人十色の趣がある。

エピソードもふんだんに散りばめられているだけに、読者は、「この人には、こんな家庭観があったのか」と興味を持ってページを綴っていただけに違いない。親子のきずなは人さまざまとはいえ、その底流には子供への思いやり、やさしさがひそんでいるという点は共通している。さらには、子供にどんな態度で接するかは、親がどう生きてきたか、どんな生活哲学を持っているかに密接にかかわっているということも理解していただけたらう。

すなわち、どんな夫婦、親子関係を築くかは、結局自分の生き方を問われることなのである。とかく仕事だけに目が行きがちなサラリーマンの家庭へのかかわり方が問題になっている折、この本は特に男性に読んでいただきたいと思う。

家風、といつては響きが古めかしくなるかもしれない。が、家庭の運営に個性、独自性

を持つことは必要だろう。本書が、親子関係の見直し、そして家庭文化の創造の一助になれば幸いである。なお、肩書は昭和六十三年六月末現在のものを用いさせていただいた。

昭和六十三年七月

日本経済新聞社

目次

1章 自分の生き方を示す

しつけは自分の生き方で	山田 洋次	12
無言で教える「自由と責任」	辻 邦生	14
親父の全力投球の姿	阿部 昭	16
しつけは「神様」にお任せ	矢代 静一	18
懸命に働く姿こそ最高の教育	水島 新司	20
青春時代を目いっぱい自由に	木村 晋介	22
何を食べるべきか伝えたい	野坂 昭如	24
子は親の鏡	おおば比呂司	26
親は子供に否定される存在	三浦 朱門	28
父親は壁のようであれ	篠沢 秀夫	30
子供に父親の姿を見せる	志茂田 景樹	32
私が反面教師	平井 富雄	34
「無法地帯」でも悪い子なし	湯沢 雍彦	36

「与える愛」の大事さ

人さまさま、育て方も自由

父親「失格」でもウソはつかず

父を見て家事に取り組む

影響力大きい家庭の雰囲気

父母に「行動学」「態度」教わる

ただ面白がつて育てただけ

健康第一、あとは御自由……

期待はあるが「好きなこと」を

仕事の緊張感を態度で示す

窯を通し、すべてさらけ出す

いつも家庭に「日差し」を

世間の動きに新鮮な興味を

2章 自立心を持たせる

生まれてすぐ始めた躰の効果

好きなように生きてみなさい

自由に遊ばせ自主性育てる

村松 英子 38

宮城 音弥 40

出石 尚三 42

赤塚 行雄 44

巷野 悟郎 46

犬養 智子 48

青島 幸男 50

河竹 登志夫 52

村松 増美 54

コシノ・ジュンコ 56

辻 協 58

小椋 佳 60

長尾 立子 62

吉村 昭 66

石ノ森章太郎 68

奥野 健男 70

自分の事は自分で

独断に陥らぬ自在な処世術

押しつけやめ自分で悟らせる

子供がするようにさせる

上京しても故郷の家は残す

「自立」を元舅に学ぶ

失敗し傷つきながら成長を

異郷で育った独立心伸ばす

自分でできることは自分で

好きなものを探し自分を磨け

自主性重んじ娘に門限なし

好きなことをどんなやろう

何となくワークシェアリング

まず自立、そして支え合う

人の心を大切にする

「自分の事は自分で」が最低線

娘のしつけに失敗繰り返し返す

「女のくせに」は禁句

石井 幹子 72

内藤 祐次 74

友竹 正則 76

紀平 悌子 78 ✓

立松 和平 80

門野 晴子 82

蜷川 幸雄 84 ✓

東 敦子 86

椎名 誠 88

鳥居 ユキ 90

青木 雨彦 92

今田 美奈子 94 ✓

村瀬 春樹 96

中島 通子 98 ✓

北村 英治 100

大宅 映子 102

高橋 悦二郎 104 ✓

吉武 輝子 106

何でも積極的に

食を豊かに、家事は当番制

「助けあい」がモットーだが……

精神的な強さを

おばあちゃん中心に自学自習

良いことに憧れる心を持つ

3章 生活体験を伝える

自然の息吹にふれる

生活体験と自然浴がモットー

願いだけ伝え、後輩に任せる

体を鍛え好きなだけ学ぶ

駄じゃれ飛ばし和気あいあい

子孫のために美田を残さず

交換日記で対話深める

想像力で相手を評価

子供の気持ちを尊重

自由の尊重

伊奈輝三 108

林 郁 110

塩田丸男 112

伊藤憲一 114

千石 保 116

小中陽太郎 118

畑 正憲 122

今井通子 124

大林宣彦 126

ちばてつや 128

渥美雅子 130

箱崎 総一 132

飛鳥 章 134

羽仁 進 136

加藤 諦三 138

沖藤典子 140

単に一緒にいるだけではダメ

喜怒哀楽を正直に

異文化体験を笑いで乗り越える

自分を見つめ複眼的な思考

午後九時のティーブレイク

家族愛の中の騒音

「娘を愛している」いつも態度に

祖母の知恵を子供に

家を通じ生活考える

やさしさの信号こそ家族の絆

家族に包まれ楽しい人生を

子供任せ、別れた夫との交流

同列等価値の三者共同生活

健康で毎日がハッピーなら

家族全員で冒険を楽しむ

母親が楽しく暮らせるよう

「地球人」として相互に理解

秋 竜山

142

吉永 みち子

144

木崎 さと子

146

木村 治美

148

深谷 昌志

150

鳩山 邦夫

152

円 より子

154

浜 美枝

156

菊竹 清訓

158

松原 純子

160

松本 零士

162

千刈 あがた

164

合田 佐和子

166

湯川 れい子

168

尾崎 隆

170

柴 陽子

172

並木 みどり

174

4章 親子の対話から

夕食時のテレビはご法度

仕事に打ち込め

他人様に迷惑かけずに

すぐ手出す父と説教する母

異文化との交流、若いうちから

放任のなかで積極性育てる

「身を飾るより本を読め」と父

押しつけ避けさりげなく助言

食事作らない人が後片付け

女性を優先、男は格を尊重

履物きちんとそろえさせる

のびやかに、素直に育て

怒る時もほめる時も本気で

決めたことは最後まで貫け

「鉄は熱いうちに打て」

感謝の気持ち忘れずに

莊村 清志

178

川崎 展宏

180

森田 健三

182

吉田 知子

184

中嶋 嶺雄

186

飯干 晃一

189

樋口 恵子

190

柳 宗民

192

ますのきよし

194

神津 善行

196

林家 木久蔵

198

北方 謙三

200

芹沢 博文

202

西川 潤

204

滝田 ゆう

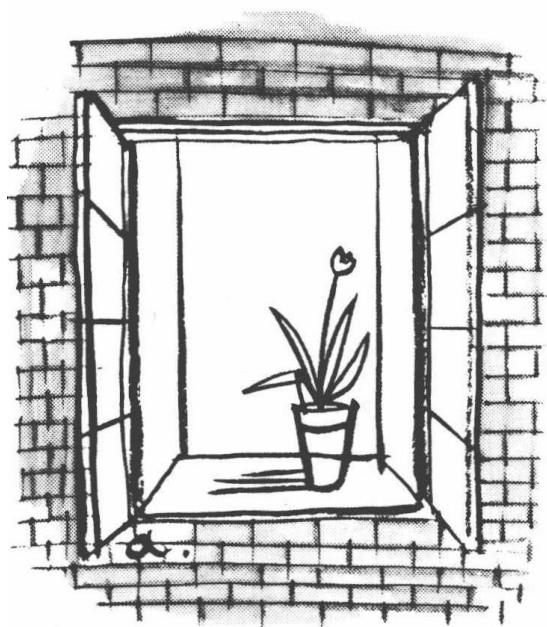
206

川津 祐介

208

意思を尊重、幼時から絵の道へ	織田 広喜	210
夫の厳しさ、わが家の安定保つ	森 瑤子	212
正直でいれば何も怖くない	芦田 淳	214
女系家族、重すぎた母親の存在	F・モレシャン	216
食卓通じ、礼儀・作法教える	三矢 隆夫	218
「うそつかない」など三原則	藤島 利彰	220
家族はどんな時にも味方	山村 美紗	222
徹底的・ホンモノ・美しいことば	薩摩 忠	224

1章 自分の生き方を示す



しつけは自分の生き方で

山田 洋次

九州人の私の父親は、ひどく堅苦しい人間だった。リュックサックひとつで満州（中国東北部）から引き揚げて来た後、山口県の宇部という街の市役所に職を得たのだが、ある地位に上がると、田舎のことだから、盆暮れに中元や歳暮が届くようになる。

ところが、父は中身も見ずに送り返したのである。いちいち手紙をそえ、あらためて包装してひもをかけ、あて名札をゆわえつけてから郵便局まで運ぶのだから大変な手間である。

まだ食物に不自由していた時だし、菓子や果物だと見当がつくような品を、なぜ受け取って食わせてくれないのかと、育ち盛りの息子たちは大いに不満だった。

公務員は、たとえ砂糖のひとかけらといえ、受け取ってはならないし、ましてや部下と上司の間にそのような関係が許されるはずがないという、明治生まれの父の信念が、息子の目には、ただ融通がきかないだけの、古くさい頑固さにしか映らなかつたものだ。

そんな父親だったから、出世などするはずがない。権力などということとは無縁に勤めを終え、退職後は小さなバス会社の役員に迎えられたが、赤字続きの会社の役員だからボー

ナスもなければ昇給もない。息子のような若い運転手よりも安い収入に甘んじて、父は老軀にムチうって働いた。

短い老後の時期を、好きな旅行を楽しんだりして過ごしていたが、たまに東京の私の家に滞在して山口県へ帰る時、親孝行のつもりで、新幹線のグリーン券を買い与えようとすると、父は頑固に拒否した。

——急ぐ用事もないオレが、忙しい人たちの邪魔をすることはない。

父は一番安い乗り物である東名高速バスに乗って帰るのが常だった。一軒の家も一坪の土地も持たず、葬式代ほどの預金だけを残して父は死んだ。

九州の菩提寺の住職と相談して、自分の戒名を決めていたので、葬式の費用の精算の時、年老いた和尚は、ご自分でおつけになったのですからと、戒名料を受け取ろうとしなかった。

しつけというのは、行儀や服装などを口うるさく言うことではない。自分の生き方を見せることなのだ、と頭では思いつつも、子供の日常のふるまいにクドクド口を出しては嫌がられる、昭和生まれの私である。

(映画監督)

無言で教える「自由と責任」

辻 邦生

父が私を育てたやり方を思い出すと、ちょうどロッククライミングをする登山家のようなだったと思う。父が先に登り、私があとにつづく。ハーケンの打ち方、ロープの扱い方などは、下から登りながら、見よう見まねで学んでゆく。口で言うのではなく、生き方を身体と行いで、教えるというやり方だ。

私が十歳の頃、夜おそく帰宅した父が、板と釘、金槌を持ってついてくるように言った。暗い夜道のまん中に、四角い下水溝がぽっかり黒い穴のように口をあけている。父は、私と一緒に、それをふさぐドブ板を作ったのだった。

「これで安心だ。こうしておけば、落ちて怪我をする人はいないからね」。

父は、人に親切にせよとか、かくれて善行をほどこせなどとは言わなかった。ただ黙って、暗い夜道で、父親と息子が黙々とドブ板を作る。それだけだった。しかしそこには口であれこれお説教する以上のものがあつた。そうした有無を言わさぬ力が、私の子供っぽい反発心や自分勝手な考えを反省させたのであつた。

旧制高校の頃、私は落第したり、迷ったりして、ずいぶんと道草を食ったが、父は黙っ